

身黒テヤウヤク朽身、又ヤセテ白赤日月ノ如シ、白ミワタリテ後ツ、シム、又遍身小瘡出テ、次第ニ大ニナル、常ニカザホロシ出テ、常ニ丹瘡ノ如シ、又寒重キ處アリ、又灸所イエズ、諸ノ疵愈ズ、又俄ニ燒跡ノ如シ、澄水タリ、又馬ノ目ノ如シ、朽落シテ煎ス、漸ニ増アリ、又此病ヲ受ル人、眼白ク成、鼻厚ク大ニ成、爪落クダケテ損ズ、手足油ナク、或ハ面カシケ乾キ、又ハ或ハ肥タル松ニ似タリ、眉ノ毛落、如此多種ノ不同有トイエドモ、痛カラズ、五癩八風等種々ノ異體併風血虫ノ所爲也、ソノ形本書等ニ委記ス、可見之、

〔諼草小言〕二白石東雅總論ニ、梵語ヲ取テ、此語トナセシトアル中ニ、癩疾ノ人ヲカハラモノトイフハ、迦摩羅也、翻シテ癩病トイフトミエタリ、サレド是ハ京師ノ乞食非人ハ皆鴨川ノ河原ニ居ル故ニ、人呼デカハラモノト云ルナルベシ、又アナバタト云ハ、阿耨波陀也、翻シテ不生トイフトミエタリト、是モアナバタトハ穴端ナルベシ、葬穴ニ近キヲ云ナラン、是等恐クハ牽強ニ近カルベシ、先生ノ博洽ナルモ、三思ノ失アルニ似タルモノアルカ、

〔玉勝間〕八癩病をかたゐといふこと

ある人のいはく、俗に癩病をかたゐといふは、害大の字なり、癩病一名を害大風といふ、證治要決に見えたりといへり、すべて此たぐひの説は、うちきくには、うべくしく聞ゆれども、よく思へばみなあたらぬこと也、いかにといふに、すべて俗語は書を考へて云出る物にはあらず、字音の言の多きも、おほくは佛ぶみの語にて、これむかしほうしの常にいふを聞なれたるより、うつれるものなり、佛語ならぬも、近き書に多く見えて、聞なれたる言こそあれ、遠きからぶみに、いとまれに見えたる言などをば、世の人はいかにして去りていひ出む、たましく似たることを見つければ、ゆくりなくそれより出たりと思ふは、ひがこと也、癩病人をかたゐといふは、乞兒カクガキより轉れる言也、そはいとことなるがごとくなれど、人をいやしめにくみて、かたゐといへることあれば、